



《ジェネラリスト BOOKS》 薬の上手な出し方 &やめ方

矢吹 拓＝編

定価：本体 4,000 円＋税
A5・322 頁／医学書院／2020
[ISBN978-4-260-03959-8]

薬の「上手なやめ方」へ一歩踏み出すために

評者 平井みどり 兵庫県赤十字血液センター所長

この時期（2020年5月）だから新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の話から入ろう。レムデシビルが認可された、ファビピラビル（アビガン[®]）も、ノーベル賞受賞のイベルメクチンもと、さながら治療（の可能性がある）薬祭りの様相だ。「薬さえ決まれば大丈夫」と政治家の方々は思っておられるようだが、感染症の専門家の話を聞いているのかしらと疑問に思ってしまう。頭痛にバファリンじゃないけれど、コロナにアビガン[®]ですっきり～というわけには参りません。さほどに、一般の方々の「薬」に対するイリュージョンは大きいわけである。

薬の「上手な出し方」は誰しも知りたいところであろうが、「上手なやめ方」について、興味をもち始められたのはごく最近である。処方を見直して、不要な薬を減らそうと提案したところ、「必要だから処方してるんだ！ やめるとは何事だ！」と激怒されたことがある。それもつい最近のこと。前医の処方には手をつけない、という不文律(?)も、そういうところから発しているのだろう。

出すも減らすも「コミュニケーション」が大事

さて、本書は三部構成になっており、1章は総論として処方上手になるためのコツが列挙されている。矢吹拓先生と、知恵袋の青島周一先生、すなわち医師と薬剤師の共同作業による処方見直しのポイントが列挙されている。患者さんとのコミュニケーションについては、行動理論に基づく不確実性と、そのための医療者と患者の話し合い・相互理解の必要性が強調される。2章は紙上カンファレンスで、あるある症例に基づき医師・薬剤師を中心とした座談会が、楽しく盛り上がる様子（時に鋭い突っ込み）が活写されている。このジャンルでは有名な先生ばかりが登場し、とても楽しく読めるのだが、ページごとに役立つ知識・知恵が満載で、読み返すたびに新しい発見がある。「とりあえず」の解説など、思わず笑ってしまった（詳しくは本書p.123をお読みください）。3章は薬の始め時・やめ時について、各科の専門家からのアドバイスが、初心者にもわかりやすく解説されている。薬の選択も秀逸だし、薬を中止したあと、どこに注意すればよいかが示されているので、読んだ後には処方を振り返って「一度やめてみようかな」と思えるのではないだろうか。

本書の編者である矢吹先生は、栃木医療センターの院長と相談してポリファーマシーの是正を開始した時に、地域の医師会の先生方の意見を聞きつつ、挨拶に回ったそうだ。パイオニアの矢吹先生も、最初はとても苦労されたのである。

医療に100%の正解は、まあ、ない。限りなくグレーの地平に道筋をつけるには、「コミュニケーション」が必要不可欠である。その意味で、本書の総論部分はすべての医療者に読んでいただきたいと強く思う。治療の過程で正解をキメるのは無理としても、そこにできるだけ近づこうと努力すること、それが患者さんに幸せをもたらし、患者さんの笑顔が医療従事者の（過酷な日々のなかでの）明日への頑張りにつながるのである。

